

## オオムラサキ（国蝶）の墓標

——一木一草にまで愛情を——

小泉雄一郎

幼稚園に送って行く途中の息子が、急にベソをかきうに、うなだれて言う。

「あそこの桜、かわいそう。下向してる。しおれちゃう。大変だあ!!」

息子の言ったのは、ふと見かけた道端の、しだれ桜のことであつた。あれが本来のスタイルの品種なんだということの説明しても、なかなか納得出来ぬようであつた。そういえば筆者の長女も、未だ幼児の頃、春を告げて、ニコニコ笑いかけていた水仙が、程なくしぼみかかつて来たのを見たとき、背負われた父親の背でシクシク泣き出したものであつた。

「来年春が来ると、また、今日わあっ!! っつて咲くんだよ。だから力を貯めるところと地面の中に、かくれんぼしちゃうんだよ。」

と説明してやっても花の消滅して行く事に対するショックは莫大なものであつたようだ。

お互い日本人として誰も幼ない頃は、花ばかりでなく、一木一草に到るまで、こんなに自然に対して愛着心があつたのではなからうか。だが残念ながら、この愛情も成人になるに従つて急速に薄れていくようである。何故だろうと思う。ただただ懐ばかり、みにくくふくれ上つて魂はない、おぼけのような巨人ばかりが育つてしまつて、世界中の到る所の国の人から「アニマル!!」と頭から軽蔑されている事でさえ分らなくて、この国、最高と云われる大学の卒業式でさえ、学長から「太つた豚になるよりも、やせたソクラテスになれ!!」などと訓辞をたまう国民ばかりになつてしまつて行くようである。とにかく、アニマルや太つた豚が次々と育つて行くこの国のお国柄というのは一体、何処にその出発点があるのであろうか。一木一草どころか、ありとあらゆる環境破壊を自らの財布をふくらます為には平然と行ない得る、こんなデタラメな国。そんな、お国ぶりは、この国の「花泥棒は泥棒でない:」と云う諺となつて、あらわされているようでもある。

だが同じ地球の上でも、ヨーロッパなどへ行くと、日本との各方面での差をあらゆる事象について思い知らされ、その最たるものの一つが自然を守ろうとする姿勢である。欧州の空港へ下り立った方は、すぐに気が付かれ